

出エジプト記3-4章 「羊飼いモーセの召し」

1A 使命を与える神 3

- 1B 柴の中の燃える炎 1-6
 - 1C 近づくモーセ 1-3
 - 2C 聖なる地 4-6
- 2B 出エジプトの命令 7-10
- 3B モーセのためらい 11-14
 - 1C ともにおられる主 11-12
 - 2C 「わたしはある」 13-14
- 4B 遣わされて会う人々 15-22
 - 1C 聞き従うイスラエル人 15-17
 - 2C 強いらせて去らせるファラオ 18-20
 - 3C 金銀を渡すエジプト人 21-22

2A 召しを拒むモーセ 4

- 1B 主の現れたしるし 1-9
 - 1C 神の杖 1-5
 - 2C ツアラアトからの清め 6-9
- 2B 口の重さ 10-17
 - 1C ことばを教える主 10-12
 - 2C 兄アロンの代弁 13-17
- 3B ミディアン人から離れる旅 18-26
 - 1C エジプトへの旅 18-20
 - 2C 長子の死 21-23
 - 3C 息子の割礼 24-26
 - 4C 長老たちの迎え 27-31

本文

出エジプト記 3 章を開いてください。主は、ご自分の契約のとおり、イスラエルの民を増やし、強くして行かれました。しかし、ヨセフを知らないファラオが出て、彼らを労役で苦しみ始めます。その虐待がエスカレートして、ついに、ヘブル人の男の子をナイル川に投げ込めとの命令まで出ました。そこで、主が選ばれたのがモーセです。レビ人の親が彼を瀝青と樹脂を塗ったかごの中に入れ、それで見つけたのが、なんとファラオ自身の娘だったのです。娘なのに、父の命令を公然と無視します。モーセを自分の養子にしたのです。

そして、モーセは、自分の名が示すように、苦しみと虐げの中から、同胞イスラエル人を引き出すべく動き始めます。虐げていたエジプト人を殺してしまいます。けれども、イスラエル人がイスラエル人を虐めているのを、次に見ます。仲裁に入ったら、エジプト人を殺したのがすでにばれていきました。ファラオがそれを聞いて、モーセを殺そうとしましたが、彼は荒野に逃げ、ミディアン人の祭司の家の世話を受けます。彼が、祭司の娘を、虐めている羊飼いたちから救い出したからです。そして娘の一人、ツィポラを妻として迎え、子どもも生みます。

そして長い年月が経ちました。モーセがエジプトを出てから四十年後のことです。2章 23-25 節を読みます。「²³ それから何年もたって、エジプトの王は死んだ。イスラエルの子らは重い労働にうめき、泣き叫んだ。重い労働による彼らの叫びは神に届いた。²⁴ 神は彼らの嘆きを聞き、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた。²⁵ 神はイスラエルの子らをご覧になった。神は彼らをみこころに留められた。」

私たちは創世記を思い出さないといけません。出エジプト記と創世記は、別の話ではなく、一つの話です。主が、アブラハムを召し出し、契約を結ばれました。そしてイサクに、そしてヤコブに引き継がれました。ヤコブから、十二人の息子が生まれ、それぞれが部族になる預言も与えられました。そして、彼らはエジプトに下ったのです。アブラハムと契約を結ばれた時に、主は、彼らが寄留者となって、四百年の間、奴隸として苦しめられるが、こう言われています。「^{15:14} しかし、彼らが奴隸として仕えるその国を、わたしはさばく。その後、彼らは多くの財産とともに、そこから出て来る。」ついに、このことを実行する時が来たのです。

1A 使命を与える神 3

それで主は、モーセにエジプトに行くように呼びかけられます。その応答に困難を覚えたというのが、これから私たちが見ていく、3-4章です。

1B 柴の中の燃える炎 1-6

1C 近づくモーセ 1-3

¹ モーセは、ミディアンの祭司、しゅうとイテロの羊を飼っていた。彼はその群れを荒野の奥まで導いて、神の山ホレブにやって來た。

ミディアン人は、アブラハムが、サラの死後、得た妻から生まれたのがミディアンです。イテロは、祭司でした。初期のミディアン人の宗教は、アブラハムの信仰の系譜なので、唯一神、あるいはイスラエルの神がおられるが、他の神々もあるというような妥協しているような信仰であったとも言われています。しかし、エジプトから帰って來たモーセに対して、イテロが、イスラエルの神は確かに偉大であると、ほめたたえています。そこで、はっきりとイスラエルの神を認めました。しかし、後に、モーセたちがミディアン人と戦う時は、既に神々を携えてイスラエルの宿営に入って來たので、た

ちまち偶像礼拝に陥つていったと考えられます。

モーセはこの時、八十歳です。四十年間、羊飼いをしていました。それは、彼がエジプトの王族の息子という地位から、一気に何でもない者になってしまったことを意味し、しかし、彼は主なる神への信仰から、離れることはできませんでした。しかし、同胞の苦しみと虐げから自分が救い出すなんていう、野心は当の昔に捨て去っていました。

しかし、彼がそこに置かれたのは、神の尊いご計画があったからです。ここに、「神の山ホレブ」と書いてあります。この山で、後にモーセは律法が与えられ、預言者としての働きの多くを、ここで費やすことになります。そして荒野の旅を導くのですが、彼は、すでにそこで、荒野について熟知していました。他のイスラエルの子らは、肥沃なゴシェンの地で生きていますから、荒野の旅について、不平を鳴らしていきます。それでも、モーセが導いていくことができたのは、この四十年間の荒野での生活で整えられたからに他なりません。

そして、モーセは羊飼いということで、うなじのこわい民を忍耐し、教え、さばき、敵から守り、導いていくことができました。後に、聖書は、指導者を羊飼いと呼ぶようになります。イスラエルの王、ダビデも羊飼い出身ですし、主は、ご自身を良い羊飼いと呼ばされました。使徒ペテロは、教会を治めるのに、「羊を飼いなさい」「羊を養いなさい」と、羊飼いになるように命じられたのです。ですから、イスラエル人を救い出すのに、最適なところに居たと思っていたエジプトの王宮ではなく、むしろ、この荒野での生活のほうが、イスラエルを約束の地まで導くのに最適な備えでした。

自分が、やりたいと思っていたこととは程遠いところに居た時に、実は、主から与えられた思いを行うために、備えられていたということです。主の思いは、私たちの思いとは異なり、天が地よりも高いように、私たちの思いよりも高いのです。そして、パウロはエペソ2章で書きました。「2:10 実に、私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えてくださいました。」

そして「荒野の奥」とあります。これを「西側」と訳す聖書もあります。というのは、私たちは地図を開いたら、北が上になりますが、当時のその地域の人々は東が上になっています。日の出の方向が、上なんですね。そして、「奥」というのはその反対、西側になります。そして「導いて」とありますが、このヘブル語は、かなり強引に連れて行ったとう意味合いがあります。いつもの場所には、食べることのできるような草木がなかったのでしょう、それずっと奥、西に連れて行って、そこがホレブだった、ということです。

² すると主の使いが、柴の茂みのただ中の、燃える炎の中で彼に現れた。彼が見ると、なんと、燃えているのに柴は燃え尽きていたなかった。³ モーセは思った。「近寄って、この大いなる光景を見よ

う。なぜ柴が燃え尽きないのだろう。」

「主の使い」が現れています。これからすぐに、主ご自身が語られています。つまり、主の使いとは、主ご自身でもあります。創世記の時から、ハガルに現れていました。また三人の旅人の一人は、この言葉は使われていませんが、明らかに主ご自身と一つに現れています。そして、モリヤ山にいって、イサクを献げなさいと命じられたのは、主の使いです。主から遣わされた者であり、かつ主ご自身であるというのが、三位一体の神を信じていないと分かりません。イエスご自身が、ベツレヘムで人としてお生まれになる前の、お姿ではないか？というのが、神学者たちの意見です。主イエスご自身が、アブラハムがご自身を見たと言わっていて(ヨハネ 8:56 参照)います。

そして、「柴の茂み」であります。この柴は、アカシアの木かそれに類似する木であります。後に、幕屋を構成する材料に、アカシアの木が出てきます。これを示しているところは、アダムに主が言われた呪いです。「大地は、あなたに対して茨とあざみを生えさせ(創 3:18)」と、主は言われました。水の潤いのない、呪われた大地ということです。イエスが、十字架に付けられる時に茨の冠をかぶっていたのも、罪を負われた姿をよく表しています。

そこに、「炎の中で」現れています。主がおられるところに火があるというのは、ソドムとゴモラに対して火によって滅ぼされたところで示されていましたが、モーセに現れたところで前面に出てきます。エジプトに対する災いに、火が降って来たものがあり、また、ホレブの山には、後に稻妻、雷が落ち、煙が立っていました。荒野の旅では、幕屋に火の柱が立っていました。エゼキエルは、ケルビムの幻を見ますが、それは幕屋に置かれている、宥めの蓋のケルビムですが、火の中にいます。ヘブル 12 章には、「私たちの神は焼き尽くす火なのです。」とあります。

つまり、聖なる神が、罪で呪われている大地に現れておられる姿です。この方を信じる者には、恵みがあり、いけにえの流される血によって、この方のご榮光を見る事ができますが、信じない者たちにとっては、焼き尽くす火、裁きになります。

2C 聖なる地 4-6

⁴ 主は、彼が横切って見に来るのをご覧になった。神は柴の茂みの中から彼に「モーセ、モーセ」と呼びかけられた。彼は「はい、ここにおります」と答えた。

モーセは、「これはなんと、すごい光景だ」として、近づいて見にきました。横切った時に、茂みの中から、「モーセ、モーセ」と呼びかけられます。二度、名前を持って呼びかけられるのは、親しみがあり、またその人を知っていることを示すものです。サムエルを召される時も、主は、「サムエル、サムエル」と言われましたし、パウロが召される時も、「サウロ、サウロ」と言われました。

そして、非常に興味深いことに、モーセは即座に、「はい、ここにあります」と答えています。これは、主のしもべの姿です。奉仕者心得の学びにおいて、主に仕えるとは、何ができるか？ではなく、いつでも主人の言うことに用意のできている、「いつでも、ここにいます」という姿勢だということを学びますが、まさに、その姿を示しています。つまり、モーセは、ミディアン人の祭司の家に、四十年住んでいましたが、主なる神をひと時も忘れていたことが分かります。

⁵ 神は仰せられた。「ここに近づいてはならない。あなたの履き物を脱げ。あなたの立っている場所は聖なる地である。」

モーセは、好奇心で、燃える柴のところに来たのですが、すぐに「近づいてはならない」と、主は戒められました。そうです、ここは聖なる地なのです。聖なる神がおられるからです。「履き物を脱げ」というのは、分かりますね。私たち日本人は、相手を敬うために相手の家に入る時に、履き物を脱ぎます。お寺でもそうですし、神社でもそうですし、そしてイスラム教のモスクでも、必ず履き物を脱ぎます。それは、聖なる方がここにおり、恐れ敬わなければいけないことを示します。

⁶ さらに仰せられた。「わたしはあなたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」モーセは顔を隠した。神を仰ぎ見るのを恐れたからである。

ついに現れました。四百年の月日が経ち、かつてアブラハムに現れた神、イサクに現れた神、そしてヤコブにも現れました。その方が、目の前におられたのです！それで、モーセは、あまりにも畏れ多く、顔を隠しています。

2B 出エジプトの命令 7—10

⁷ 主は言われた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみを確かに見、追い立てる者たちの前での彼らの叫びを聞いた。わたしは彼らの痛みを確かに知っている。

主は、苦しみを見ました。そして、叫びを聞きました。そして痛みを知っておられます。生きておられる方です。見ることができ、聞くことができ、それで知っておられます。目に見えない神を、どうして知ることができようか？というのが、偶像礼拝者の主張ですが、その偶像は、見ることも、聞くことも、語ることもできません。神を我々が知っても、相手は自分を知らないのです。イスラエルの神は、その反対です。

⁸ わたしが下って来たのは、エジプトの手から彼らを救い出し、その地から、広く良い地、乳と蜜の流れる地に、カナン人、ヒッタイト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人のいる場所に、彼らを導き上るためである。

「下って来た」と、主は言われますが、天から地に下ってこられました。そして、行われるのは、第一に、「エジプトの手から彼らを救い出」ことです。イスラエルは、神の救いの証し人として立てられていることを、思い出してください。アダムが罪を犯し、大地がのろわれ、そこで罪の縄目で苦しんでいる私たちを救い出すことを、示しています。

第二に、「広く良い地、乳と蜜の流れる地」に、連れて行かれます。荒野に対して、このようなすばらしい地に行きます。乳と蜜の流れる地とは、牛や羊が飼うことのできる牧畜のことを指しており、また蜜は、なつめやしの木の実、デーツのことを指しているとも言われます。農作物です。実が結ばれるところです。救いは、苦しみや縄目から救い出されるだけでなく、神の約束されたものを受け継ぐところまで含みます。御靈による約束、御靈から出て来る実があります。私たちが罪から救われ、御靈を受けること。そして御靈によって、神の国に入る保証が与えられています。

それから、第三に「カナン人、ヒッタイト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人のいる場所」とあります。総称して、すべてをカナン人とも言いますが、細かく分けるとこれだけいます。申命記 7 章 1 節には、これに加えてギルガシ人がおり、「七つの民」と呼ばれています。追い払われるという約束です。御靈によって、敵に打ち勝ち、肉に打ち勝ち、神に与えられたものを、事実、受け取るようになります。

⁹ 今、見よ、イスラエルの子らの叫びはわたしに届いた。わたしはまた、エジプト人が彼らを虐げている有様を見た。¹⁰ 今、行け。わたしは、あなたをファラオのもとに遣わす。わたしの民、イスラエルの子らをエジプトから導き出せ。」

主が、モーセに命令しています。遣わすと言われています。そして主は、イスラエルを「わたしの民」、ご自分の所有だとしています。ですから、彼らの苦しみはご自身の痛みなのです。

3B モーセのためらい 11-14

ここで、そのまま出て行けば、4 章 18 節に飛ばすことができます。いや、モーセがイテロのもとを離れてからも、いろいろごたごたがありますが、本格始動するのは、7 章 6 節です。「そこでモーセとアロンはそのように行った」とあります。けれども、モーセが、いろいろ主に言って、自分がいかに、行きたくないか弁解をするのです。しかし、主はそのモーセの弁解とつぶやきに、付き合ってくださいます。主は、忍耐深い方ですね。私たちのためらいや弁解にさえ、付き合ってくださいます。

1C ともにおられる主 11-12

¹¹ モーセは神に言った。「私は、いったい何者なのでしょう。ファラオのもとに行き、イスラエルの子らをエジプトから導き出さなければならないとは。」

午前礼拝で、じっくりと学びました。「私は、いったい何者なのでしょう」と言っていますが、本当の問いは、「神はいったい、どのような方なのでしょう」であります。神が呼びかけて、命じておられるのですから、責任はすべて神が取ってくださるのであります。エジプトから、イスラエルの子を導き出すのは、神が行われることで、モーセはただ聞き従うだけです。このことが分かるまで、モーセは、今、7章 6 節で読んだところ、「そのように行った」とするところまで、ずっと続きます。ただ言われることを、聞いて、行っているところで、次々とエジプトにしと不思議が、災いが下ります。

ここなのです、主に仕えるということは、ただ一つのことに心を留めればよいのです。「主人が言っていることに、聞き従うことです。みんなさんが、主に仕えるという時に、「主よ、あなたは何をお語りになっていますか。私は、ここにあります。」ということで仕えるのです。

¹² 神は仰せられた。「わたしが、あなたとともにいる。これが、あなたのためのしるしである。このわたしがあなたを遣わすのだ。あなたがこの民をエジプトから導き出すとき、あなたがたは、この山で神に仕えなければならない。」

神は、ご自身の絶対的主権を宣言しておられます。「わたし」が、ともにいるのだ。「このわたし」が、遣わすのだと。徹底的な上下関係です。このわたしが言うのだから、そのまま従いなさいということです。そこには、議論の余地がありません。自分にとって、こうなるのだから、だから、従うという条件を付けると、それは偶像となっていきます。自分の思いや願い、欲望を満たす手段が神となるのです。それは自分を神とすることですが、まことの神は真逆です。この方が言われるのだから、というだけで、聞き従う理由があるのです。

そして、「ともにいる」ということ自体が、「あなたのためのしるし」ということです。これまで、アブラハム、イサク、ヤコブを見て、周囲の人々は、「神がともにおられる」と証言しました。ヨセフに至つては、ファラオは、「神の御靈が宿っている」とまで言いました。

新しい情報をモーセに与えます。「あなたがたは、この山で神に仕えなければならない」ということです。モーセは、ここで、燃えている柴の中におられる主を、礼拝ましたが、そこまでイスラエルの子らを連れてきて、同じように礼拝を献げるよう導くのです。主に立てられた人は、自分自身が主に礼拝する、その限りのところまで他の人々を導くことができます。つまり、自分自身が、主の前に出て、礼拝するということこそが、人々を導くことのできる源泉だということです。

2C 「わたしはある」 13-14

¹³ モーセは神に言った。「今、私がイスラエルの子らのところに行き、『あなたがたの父祖の神が、あなたがたのもとに私を遣わされた』と言えば、彼らは『その名は何か』と私に聞くでしょう。私は彼らに何と答えればよいのでしょうか。」

イスラエルの人々から、「あなたの言っている、父祖の神って、どの神のこと言っているの？その名は？」と聞かれるのではないか？と言われています。名が、いかに大切なものであったかは、創世記で、主が人に、動物を連れて来て、それに名前を付けるところで示されていました。名というのは、その本質を示します。

さらに、エジプトに住んでいるイスラエル人は、多神教に囲まれています。無数の神々がいました。何でも神になりました。その中で、「あなたの言っている神は、どの神なの？」ということで、名前を尋ねるのではないか？ということです。

¹⁴ 神はモーセに仰せられた。「わたしは『わたしはある』という者である。」また仰せられた。「あなたはイスラエルの子らに、こう言わなければならない。『わたしはある』という方が私をあなたがたのところに遣わされた、と。」

すごい名前です。「エヒイエ・アシェル・エヒイエהָאֵשׁ אֱלֹהִים」「わたしはある」ということですが、どんな名なのか？と尋ねられて、そういった範疇にはいない、比較もしようのない者だ、という意味が基本にあります。「わたしは、わたしだ」と。そして、もっと文法的に正確に言いますと、「在るものになる」という意味合いがあります。つまり、わたし自身が、すべてのすべてになるべく、どんなものにもなるということです。

これはすでに、主が、ご自身が誰であるかを示される時に、現ってきたものです。アブラハムが、モリヤ山でイサクを献げようとした時に、代わりに雄羊が用意されていました。それで、「ヤハウエ・イルエ」あるいは「アドナイ・イルエ」です。「主は備え」あるいは「主は見られている」という意味です。荒野の旅でアマレク人がイスラエル人を襲ってきました。モーセが手を上げ続けるとイスラエルは優勢になり、ついに勝つことができました。それで、「ヤハウエ・ニシ」とモーセは呼びました。「ヤハウエはわが旗」です。主が戦い、勝ってくださいます。そして、「ヤハウエ・シャローム」は、ギデオンが恐れて、自分がミディアン人と戦えないと思っていた時に、平安になってくださったのです。そして、エレミヤの時代、不義がはびこっていた時は、「ヤハウエ・ツィドュケヌ」「主は正義」です。

そして主イエスご自身が、「イエホшуア」であり、「ヤハウエは救い」であります。そして、ヨハネの福音書には、「わたしは、世の光である」「わたしは、道、真理、いのちである」とか、「わたしは、いのちのパンである」とか言われ、ユダヤ人たちの前で、「アブラハムがいた前から、『わたしはある』なのです（ヨハネ 8:58 参照）」と言われました。それで石を投げつけようとしたのです、なぜなら、主ご自身が、モーセに現れた、「わたしはある」と宣言されたのですから。

4B 遣わされて会う人々 15-22

主は次に、ご自分の計画を詳しく示されます。

1C 聞き従うイスラエル人 15-17

¹⁵ 神はさらにモーセに仰せられた。「イスラエルの子らに、こう言え。『あなたがたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、主が、あなたがたのところに私を遣わされた』と。これが永遠にわたしの名である。これが代々にわたり、わたしの呼び名である。

主は、「あなたがたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」と言われて、次に太字で「主」と言われています。これが、聖四文字とも言われている「יהוה YHWH」です。先の「わたしはある」というものである」を短縮した形と言われています。ユダヤ人は、主の御名は畏れ多いとして、それを発音することさえ、お名前を限定してしまうことで、敢えて、主人を意味するアドナイに言い換えたりしています。子音だけなので、発音はどのようなものか分からぬのですが、学者の多くは、ヤハウェであろうとされています。

主は、ここで、これが「代々にわたり、わたしの呼び名」と言われていますね。事実、主ご自身が、「わたしはある」と言われ、ずっと神の名なのです。

¹⁶ 行って、イスラエルの長老たちを集めて言え。『あなたがたの父祖の神、アブラハム、イサク、ヤコブの神、主が私に現れてこう言われた。「わたしは、あなたがたのこと、またエジプトであなたがたに対してなされていることを、必ず顧みる。¹⁷ だからわたしは、あなたがたをエジプトでの苦しみから解放して、カナン人、ヒッタイト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の地へ、乳と蜜の流れる地へ導き上ると言ったのである」と。』

イスラエルの長老たちに、主のご計画を伝えなさいと言いつけています。

2C 強いらせて去らせるファラオ 18-20

¹⁸ 彼らはあなたの声に聞き従う。あなたはイスラエルの長老たちと一緒にエジプトの王のところに行き、彼にこう言え。『ヘブル人の神、主が私たちにお会いくださいました。今、どうか私たちに荒野へ三日の道のりを行かせ、私たちの神、主にいけにえを献げさせてください。』¹⁹ しかし、エジプトの王は強いられなければあなたがたを行かせないことを、わたしはよく知っている。

イスラエルの長老たちは聞き従います。そして、ファラオに言いに行きます。それが、「三日の道のりを行かせて、ヘブル人の神にいけにえを献げさせてください」というものです。羊飼いであるというだけで、エジプト人は忌み嫌っていたことを思い出してください。ましてや、いけにえにして献げるとなれば、彼らを怒らせてしまいます。それで、三日の距離を取ります。ところが、エジプトの王ファラオは、聞き従いません。これを、主ご自身が前もってよく知っておられます。

²⁰ わたしはこの手を伸ばし、エジプトのただ中であらゆる不思議を行い、エジプトを打つ。その後で、

彼はあなたがたを去らせる。

主は、ファラオの頑なさを用いられて、かえってエジプトの中で不思議を行われ、裁きを下し、それで、強いらせてファラオがイスラエルの子らを出させるようにされます。この「かなくなさ」ということが、モーセにとって、そして私たちももちろんそうですが、理解が困難になります。福音を語ることに強情を張ることに、私たちは気落ちします。しかし、主はそれも、ご自分の御手の中にあり、頑なさを用いられるのです。神の主権を受け入れる必要があるのです。

3C 金銀を渡すエジプト人 21-22

²¹わたしは、エジプトがこの民に好意を持つようになる。あなたがたが出て行くとき、何も持たずにして行くことはない。²²女はみな、近所の女、および自分の家に身を寄せている女に、銀の飾り、金の飾り、そして衣服を求め、それを、自分の息子や娘の身に着けさせなさい。こうしてあなたがたは、エジプト人からはぎ取りなさい。」

エジプトから出て行く時に、なんと主は、エジプト人に好意を持つようにしてくださいます。これは、ファラオのしていることが、あまりにも悪く、エジプト人も、イスラエル人によって明らかにされたことで、むしろ好意を持つということでしょう。あるいは、イスラエル人をエジプトに抑え込んでいたら、災いが下るので、早く出て行ってほしいと思っているからです。ともかく、主への恐れが、民衆には伝わります。

それで、金銀や衣服を求めたら、彼らはくれるのです。これまで、イスラエル人たちは、奴隸として働かされて無賃労働でしたから、今ここで、剥ぎ取ると言っていますが、報酬を受け取るのです。そして大事なのは、これらの金銀は自分たちを着飾るものではなく、主の幕屋に使われます。

2A 召しを拒むモーセ 4

ここまで、主が丁寧に、モーセの疑問に答えて来られました。しかし、彼はさらに質問します。もはや、質問でなく、行きたくない理由を言っているにしかすぎないことが明らかになります。

1B 主の現れたしるし 1-9

1C 神の杖 1-5

¹モーセは答えた。「ですが、彼らは私の言うことを信じず、私の声に耳を傾けないでしょう。むしろ、『主はあなたに現れなかった』と言うでしょう。」

自分たちの父祖の神であり、ヤハウェなる名前であることが分かったけれども、あなたに現れたかどうか分からぬ、と言われるのではないか?という疑問です。これを今に直せば、「イエス・キリストについては、分かったけれども、あなたが福音宣教者、また指導者だとは思わないよ。」と

言われたらどうか？ということです。午前礼拝でも話しましたが、とにかく彼は自信を失っています。エジプトで王宮にいたのに、イスラエル人たちに信じてもらえなかつたのですから。

² 主は彼に言われた。「あなたが手に持っているものは何か。」彼は答えた。「杖です。」³ すると言われた。「それを地に投げよ。」彼はそれを地に投げた。すると、それは蛇になった。モーセはそれから身を引いた。⁴ 主はモーセに言われた。「手を伸ばして、その尾をつかめ。」彼が手を伸ばしてそれを握ると、それは手の中で杖になった。⁵ 「これは、彼らの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、主があなたに現れたことを、彼らが信じるためである。」

羊飼いが当たり前のようにして持っている杖です。これを使って、しるしを神が見せてくださいます。蛇になります。そして、蛇になるだけではありません。「尾をつかめ」と言われていますが、蛇で怖いのは、かまれることですね。それを防ぐために、蛇の首、頭のすぐ下をつかみますね。けれども、主がそう言われるのですから、彼はそのまま行いました。すると、杖に戻りました。

これから、この杖が「神の杖」と呼ばれます。杖を上げて、紅海が分かれます。杖によって、岩から水があふれ出ます。ここから何が言えるのか？自分が当たり前に持っているもの、それを神に差し出すことによって、あとは神が事を行われる、ということです。差し出すことさえすれば、主があとは何とかされるのです。五千人の給食の奇跡もそうでしたね。二匹の魚と五つの晩から、五千人がたらふく食べて、ありあまるほどに主がしてくださいました。差し出すことによって、主が事を行われます。

自分自身を獻げていますか？という、問いかけを主は行われるのです。そんなことができません！という人があまりにも多いです。いいえ、あまりにも身近で、自分がやっていることさえ気づいていないぐらい、できていることを差し出すのです。人は、自分の身近にあることが、神の恵みであることに気づいていません。それを獻げてください。

2C ツアラアトからの清め 6-9

⁶ 主はまた、彼に言われた。「手を懐に入れよ。」彼は手を懐に入れた。そして出した。なんと、彼の手はツアラアトに冒され、雪のようになっていた。⁷ また主は言われた。「あなたの手をもう一度懐に入れよ。」そこで彼はもう一度、手を懐に入れた。そして懐から出した。なんと、それは再び自分の肉のようになっていた。

ツアラアト、らい病です。状況によって、異なる皮膚病である場合もあるし、壁のツアラアト、すなわちカビだったりします。ここで、主ご自身が災いをもたらすし、また、災いを過ぎ去らせ、癒しをもたらします。どちらも、主が行われるということです。

⁸「たとえ彼らがあなたを信じず、また初めのしるしの声に聞き従わなくても、後のしるしの声は信じてあろう。⁹もしも彼らがこの二つのしるしを両方とも信じず、あなたの声に聞き従わないなら、ナイル川の水を汲んで、乾いた地面に注ぎなさい。あなたがナイル川から汲んだその水は、乾いた地面の上で血となる。」

主は、なんと親切なのでしょうか！一つのしるしだけでも、十分なのに、もう一つのしるしも用意してくださり、それだけでなく、ナイル川の水を血にするという、初めの災いのサンプルみたいなことも用意すると言われています。

2B 口の重さ 10-17

ところが、モーセは納得しない、いや、弁解をさらに言い立てるのです。

1C ことばを教える主 10-12

¹⁰モーセは主に言った。「ああ、わが主よ、私はことばの人ではありません。以前からそうでしたし、あなたがしもべに語られてからもそうです。私は口が重く、舌が重いのです。」

モーセは、元々、エジプトで最高の学問を受け、ことばにも行いにも優れている人でした。でも40年間、羊飼いだったので、寡黙になったのかもしれません。

¹¹主は彼に言られた。「人に口をつけたのはだれか。だれが口をきけなくし、耳をふさぎ、目を開け、また閉ざすのか。それは、わたし、主ではないか。¹²今、行け。わたしがあなたの口とともにあって、あなたが語るべきことを教える。」

主は、苛立ちを隠しておられません。わたしが、共にいるといわれました。そして、ご自分は、「わたしはある」であり、あらゆることになると言われています。さらに、しるしも用意されました。なのに、もっとも基本的なことでモーセは、拒んだのです。ご自身がことばを与えるのです。だから、モーセが口下手とか、関係のないことです。主が語られるのですから、それを信じればよいのです。

ここで、私たちがとかく使う、偽りの謙遜があります。神を怒らせる謙遜があります。それは、「私には、できません」であります。なぜなら、神が人を用いるとは神がすることであり、あなたではないからです。いや、今、杖で見たように、当たり前のようにできることを、神に対して献げるのです。そうすれば、主が行われるのです。自分ができないというのが、そもそも、神が用いることを侮辱しているのです。「だれが、あんたがやんなきやいけないと言った？」と言われるのです。

2C 兄アロンの代弁 13-17

¹³すると彼は言った。「ああ、わが主よ、どうかほかの人を遣わしてください。」

これが、モーセの本音です。もう自分は、主の行われようとしている救いの働きに、関わりたくないのです。それは、完全な自信の喪失です。しかし、ここからが神の召しに応える、醍醐味があります。自分には何もできない。だからこそ、神の言われることに従う。そして、肉ではなく、御靈にしたがう。主のお働きに用いられる準備ができたのです。

イエスが、弟子たちに言わされた言葉を思い出しましょう。「ヨハ 15:5 わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人にとどまっているなら、その人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。」イエスから離れては、何もすることができないのです。私たちはどこかで、ほんの少しだったら、できると思います。けれども、モーセ体験がある意味で、必要なのです。人間的には、すべてのことが整えられていたのに、たった一人のイスラエル人も救えなかつたのです。

そして次に、だからこそ、主に拠り頼む覚悟が必要です。自分には全く頼りにならない、だから主に拠り頼み、主に言われることだけに集中することです。

¹⁴ すると、主の怒りがモーセに向かって燃え上り、こう言われた。「あなたの兄、レビ人アロンがいるではないか。わたしは彼が雄弁であることをよく知っている。見よ、彼はあなたに会いに出て来ている。あなたに会えば、心から喜ぶだろう。¹⁵ 彼に語り、彼の口にことばを置け。わたしはあなたの口とともにあり、また彼の口とともにあって、あなたがたがなすべきことを教える。¹⁶ 彼があなたに代わって民に語る。彼があなたにとって口となり、あなたは彼にとって神の代わりとなる。¹⁷ また、あなたはこの杖を手に取り、これでしるしを行わなければならない。」

主は、完全に怒っておられます。ここで、兄アロンを用いるからと言われています。非常にいびつなことになります。モーセとアロンが行き、ファラオの前で、目の前にファラオがいるのに、モーセはアロンだけに語ります。そしてアロンが、ファラオに語るのです。ファラオの前で、モーセが神のような存在、アロンがそのことばを代弁する預言者のようにするというのです。そして、モーセが、羊飼いの杖を使って、いろいろなしるしを行えと言われます。

これが、理想では全くないのです。アロンが、預言者として立てられることによって、アロン自身が用意できていない部分が多分にありました。その最たるもののは、金の子牛です。民の圧力によって、金の子牛を造り、イスラエル人がその周りで戯れました。それで、主が罰せなければいけなくなりました。また、姉ミリアムがモーセを中傷します。いつしょになって中傷してしまいました。アロンは、指導者として立っていないのです。

ですから、モーセは自分自身が、立たないといけなかったのです。しかし主は、無理強いすることはできないのです。ですから、理想からは劣るかたちで、モーセを用いざるを得ませんでした。

同じように、主は、今後の歴史の中で、民が強いるので、理想から劣ることをせざるを得なかつた場面が出てきます。例えば、預言者によって神が王となってイスラエルを治めるのが理想なのに、人の王が欲しいと要求するので、サウルを主は立てました。しかし、サウルが高慢になって、人々を虐げ、神に選ばれたダビデを殺そうとしていたのです。主から命じられたら、そのまま従うのが最善であることを知りましょう。

3B ミディアン人から離れる旅 18-26

1C エジプトへの旅 18-20

¹⁸ そこでモーセは行って、しゅうとイテロのもとに帰り、彼に言った。「どうか私をエジプトにいる同胞のもとに帰らせ、彼らがまだ生きながらえているかどうか、見させてください。」イテロはモーセに言った。「安心して行きなさい。」

生き長らえているかどうかという、かなり穏やかなことしか伝えていません。後に、どれだけのことを主が行われたか、再びホレブに戻って来た時に伝え、イテロは主をほめたたえます。

¹⁹ 主はミディアンでモーセに言われた。「さあ、エジプトに帰れ。あなたのいのちを取ろうとしていた者は、みな死んだ。」²⁰ そこでモーセは妻や息子たちを連れ、彼らをろばに乗せて、エジプトの地へ帰って行った。モーセは神の杖を手に取った。

主は、モーセに安心材料を与えます。命を狙っていたファラオは死にました。それで、モーセの殺害命令も解かれました。それから、神の杖を取っていきます。彼の持っているものは、これだけです。でも、どれだけの不思議がこれで行われるかしれません。

妻や息子たちを連れていますが、かつてのアブラハムと同じようになります。つまり、アブラハムが、父の家を離れて、神の示す地に行かなければいけないのですが、父テラと一緒にきました。それで、テラが死ぬまで、ハランに留まらなければいけませんでした。信仰を全く一つに持っていないと、家族の間に亀裂が走ります。

2C 長子の死 21-23

²¹ 主はモーセに言われた。「あなたがエジプトに帰ったら、わたしがあなたの手に授けたすべての不思議を心に留め、それをファラオの前で行え。しかし、わたしが彼の心を頑なにするので、彼は民を去らせない。²² そのとき、あなたはファラオに言わなければならぬ。主はこう言われる。『イスラエルはわたしの子、わたしの長子である。²³ わたしはあなたに言う。わたしの子を去らせて、彼らがわたしに仕えるようにせよ。もし去らせるのを拒むなら、見よ、わたしはあなたの子、あなたの長子を殺す。』」

主にとって、イスラエルの民は長子のような存在、かけがえのない存在です。だから、彼らを去らせないことによって、エジプトの長子を殺すと言われます。事実、最後の災いが、エジプトのあらゆる長子、また家畜も、あらゆる初子を主は殺します。

3C 息子の割礼 24-26

しかし、ここでモーセ自身の家で、大変なことが起こります。

²⁴ さて、途中、一夜を明かす場所のことだった。主はモーセに会い、彼を殺そうとされた。²⁵ そのとき、ツイポラは火打石を取って、自分の息子の包皮を取り、モーセの両足に付けて言った。「まことに、あなたは私には血の花婿です。」²⁶ すると、主はモーセを放された。彼女はそのとき、割礼のゆえに「血の花婿」と言ったのである。

モーセが寝ているうちに、息絶えて死にそうになっていたのでしょうか。主が彼を殺そうとしているという、とんでもないことが起こりました。それがどんな意味なのかを知っていたのが、妻ツイッポラです。それは、アブラハムとの契約のしるし、割礼を、息子に施していかなかったということです。割礼によって、神の民になっているしとなっています。それを行っていないことを、妻が知っていたので、それをすぐに行いました。それで、モーセを「血の花婿」と言いました。

エジプトに下る災いの時に、イスラエルの家では過越の食事があります。そこで割礼を受けていない者は過越にあずかれることも、主は教えられます。それを教えるモーセ自身が、自分の息子をイスラエルに家に加えられないのです。ややもすると、彼は、他のエジプトの長子と同じように、殺されてしまうかもしれません。つまり、モーセは、もう息子に信仰の継承をすることを、あきらめていたのです。妻のツイッポラがそれを拒んだことがあります。この後で、妻と息子たちは、家に戻ります。モーセたちが、ホレブの山に戻ってきた時に、再びいっしょになります。

主に用いられるという時に、私たちの心が一つになっていることが、本当に大切です。そこでの一致がなければ、家族と言えども、引き離されてしまう悲しみを通らないといけなくなります。

4C 長老たちの迎え 27-31

²⁷ さて、主はアロンに言われた。「荒野に行って、モーセに会え。」彼は行って、神の山でモーセに会い、口づけした。²⁸ モーセは、自分を遣わすときに主が語られたことばのすべてと、彼に命じられたしるしのすべてを、アロンに告げた。

すごいですね、何十年ぶりでしょうか、アロンがホレブのやつて来て、そこで会いました。そして一緒にエジプトに行きます。

²⁹ それからモーセとアロンは行って、イスラエルの子らの長老たちをみな集めた。³⁰ アロンは、主がモーセに語られたことばをみな語り、民の目の前でしるしを行った。³¹ 民は信じた。彼らは、主がイスラエルの子らを顧み、その苦しみをご覧になったことを聞き、ひざまずいて礼拝した。

主の言われた通りしたら、確かにイスラエルの長老たちは聞き入れ、それで民が信じました。そして、主が苦しみを顧みてくださっていることも知りました。礼拝しています。主は良い方です。

しかし、ここからが戦いです。主によって出て行くのに、今までより悪いことが起こる、という現実を次に見ていきます。神の国、みわざが進むとは、反対が激しくなるということを次回、学びます。